

## 平等と卓越性のはざままで

### — 韓国の英才学校における自律性 —

中 島 千 恵

#### はじめに

グローバル化によって国家間の経済競争と深く関連して展開される教育競争は、グローバル化に対応できる人材（グローバル人材）の育成を目指す学校やプログラムの設置・開発を各国で誘引している。これらの学校やプログラムでは、従来の学校に適応される教育法令などの一部が免除され、自律的な運営や取り組みが許容される傾向にある。

日本でも、将来国際的に活躍できるグローバルリーダー育成に資する教育に乗り出している。具体的には、高等学校及び中高一貫教育校（中等教育学校、併設型及び連携型中学校・高等学校）において、国際的素養を身に付けた人材の育成を図っている。国際的素養とは、社会課題に対する関心と深い教養、コミュニケーション能力、問題解決力などである。

このようなグローバルリーダー育成において、どのようなカリキュラムが適切なのか、法令で定められる教育課程の基準に従うことが免除され、自律的に教育課程やプログラムの研究開発が続いている。日本では、カリキュラム開発と改善のための実証的資料を得るための高校が指定され、スーパーグローバルハイスクールと呼ばれている。2014年から事業が開始し、2016年までに123校（国立12、公立73、私立38）が文部科学省によってスーパーグローバル

ハイスクールに指定されている<sup>1)</sup>。スーパーグローバルハイスクールの指定は期限が定められ、5年間とされている。文部科学省は、スーパーグローバルハイスクールにおける研究開発を当該学校の管理機関に委託している。具体的には、都道府県市教育委員会（公立高等学校）、国立大学法人（国立の高等学校）、学校法人（私立高等学校）の3者である。

スーパーグローバルハイスクールではカリキュラム開発のために必要な自律性が許されている。学校教育法施行規則第85条、第79条、第108条1項で準用する第55条に基づき、現行の教育課程の基準によらない教育課程を編成、実施して研究開発を行うことができる。

グローバルリーダー育成のために、何をどう教えるかは、国際的な関心事である。国際的な活躍ができる優秀な人材育成のために教育の卓越性を求めるのは、韓国でも同様で、グローバルハイスクールや英才学校が設置されている。これらの学校において、グローバルリーダー育成のために、学校にどのような自律性が許されているのか調査した。

本報告では、日本のグローバルハイスクール事業で重要視されている視点と課題を踏まえた上で、本題である韓国の世宗市に政策的に設置されたグローバルハイスクールと科学芸術アカデミーにおけるカリキュラム開発における学校の自律性について報告する。

## I. 日本のスーパーグローバル ハイスクールの課題

### 1. 取り組みの成功の鍵となりうるカリキュラム開発

文部科学省は、本事業の評価を行うスーパーグローバルハイスクール企画評価会議を開催する。評価などに関して有識者からの知見を得るため、文部科学省はスーパーグローバルハイスクール（SGH）事業の検証に関する有識者会議を開催している。第1回、有識者会議では、本事業について次の課題が挙げられた。

第1に、学力問題である。学力は進学実績とからめて論じられている。スーパーグローバルハイスクールの試みによって進学実績が低下した学校もあるが、渋谷学園の場合、進学実績は低下しなかった。その要因として、学科横断的な教材開発が大きいと指摘されている。第2に、日本語で自らの考えを自信をもって伝えることができない、第3に、英語教育が中心になっているのが最大の課題であるとして議論されている<sup>2)</sup>。これらの課題から推察できるのは、カリキュラム開発が成功の鍵である可能性が高いということである。

SGH 企画評価会議協力者によるスーパーグローバルハイスクールに関する中間評価によれば<sup>3)</sup>、モデルとなりうる実践として高く評価されたのは、4校で、そのうちの1校は京都府立鳥羽高等学校である。これら4校の評価は以下である。中間評価に掲載された内容をそのまま引用している。

#### 京都府立鳥羽高等学校

○探究のプロセスにのっとった外国語の習得及び活用は極めて高く評価できる。生徒の視野は確実に広がっており、生徒の成長でも事業の基準を十分に満たした効果があ

げている。○また、同様に大学と連携しアクティブ・ラーニングを軸とした活動の実施やアクティブ・ラーニングへの指導法転換が取組を支えている点も極めて高く評価できる。○とりわけ、PDCA サイクルが実質的に機能しており、特に成果の検証については、独自のルーブリックや生徒自身の相対的成長実感を問うアンケート、授業評価などの多様な方法が用いられており、SGH 校のモデルとなり得る取組である。

#### 名古屋大学教育学部 附属中・高等学校

○北米拠点、アジア拠点を開拓し、積極的に交流を計画・実施しており、テレビ会議システムを活用してモンゴルの学校との交流を行うなど、教育環境を国際化している点が極めて高く評価できる。○生徒の意識調査からも狙いとする「深い理解」「判断力・有用な情報収集」などの力の伸長が見られる。それぞれの仮説について、アンケート調査に基づいた数量的な分析がなされており、成果が報告されている点が極めて高く評価できる。○学校全体で「協働的探究学習」を取り入れた授業改善に取り組み、結果を活用しながら研究開発内容の改善を図りつつ進めている点が非常に優れている。

#### 愛媛大学附属高等学校

○全生徒を対象として、ローカル・グローバル・グローカルな一貫性のあるプログラムを開発し、段階的にグローバル能力を育成する工夫に富む精力的な取組に加え、成果を客観的なデータを踏まえて分析している点は極めて高く評価できる。○事業の取組に沿った生徒の育成、教員組織の構成が効果的に働いている要因として、成果と課題を常に明らかにし次への取組を明確にし

ていること、PDCA サイクルを基準とした指導の工夫・改善、アクティブ・ラーニングへの指導法転換が挙げられ、極めて高く評価できる。○特に愛媛大学との連携が密で、大学教員の出講や単位取得のみならず、国際交流提携の支援、共同研究が進められている点は高く評価できる。また、生徒による成果発表に加え、教員による研究発表・論文発表なども積極的に行われており、成果の普及についての高い意識が何れも持続可能なプログラム設計がおおいに期待できる。

関西創価高等学校

○探究のプロセスにのっとり事業が展開されており、教科で習得した学びを課題解決に役立てている点が極めて高く評価できる。○特に、探究型総合学習で生徒が積極的に運営に関わっており、生徒意識調査で多項目に亘り意識が向上している点や数々の事例を取り入れた教材開発が進められている点も極めて高く評価できる。○なお、卒業生を中心とした海外大学との連携、高大連携を活用したキャリアデザインアドバイザーなど、学びの環境が整えられている点や Critical Writing Center の設置・活用など、補助的環境が効果的に設定されている点も評価できる。

これらの評価で共通しているのは、今般の学習指導要領が掲げる「主体的、対話的で深い学び」、いわゆるアクティブ・ラーニングまたは探求型の学びがどのように実施されているかである。また、いずれも新たなプログラムを開発しているかどうかの評価基準となっていることがわかる。

これら4校とは対称的に、事業のねらいが達成されていず、大幅な経費削減、指定の解除も

やむなしとされた学校が1校あった。問題点は何であったか、以下に引用した同評価によれば、主として次の問題点が指摘されている。①主体的探究を行う時間がメインの教育課程から読み取れない、②本事業にふさわしい新たなカリキュラム開発がおこなわれていない。そして③高校側の主体性が読み取れない、というものである。

啓明学院中学校・高等学校

○SGH 取組である「学術研究」は2、3年次で1時間であり、プログラムの大部分は土曜講座や課外活動によって補われている。これらの活動のカリキュラム上の位置づけが不透明であり、年間を通じて生徒が主体的に探究を行う時間が教育課程表から読み取ることができない。生徒がどのような探究的な活動をして、ソーシャルビジネスプランを作成し、それをフィールドワークによって検証しているのか具体的な姿が見えてこないため、構想と実際に大きなずれがあることは問題である。本事業の趣旨にふさわしい新たなカリキュラムの開発が行われているとはいえ、既存のカリキュラムとの相違が不明である。○全学年で探究活動をしていくためには、担当教員の綿密な打ち合わせや情報共有が必要であるにも関わらず、SGH の中心となる「学術研究」担当者の打合せがどの程度、どのように行われているかが不明である。また、取組に関して、系列校である関西学院大学の連携に全て依存してしまっており、高校側の主体性がどのように担保されているのか十分に読み取ることができない。○この「学術研究」によるレポートは、あらかじめ示された文献のもと分析読書を実践、発表・議論、まとめられている。「学術研究」の取組によ

り構想の「ソーシャル・アントレプレナーシップを備えたグローバル・リーダーの育成」のための資質・能力を育成しているかどうか説明が不十分である。

## 2. 求められる自律性

成功事例でも、残念ながら良い評価が得られなかった事例においても、共通して求められているのは、学校の自律的な教育プログラムの開発の内容と質である。本来、グローバルハイスクールのためのカリキュラム開発が目的で指定されている学校であるため、目的にふさわしいカリキュラム開発と実践が行われていなければ指定が解除される。5年の取り組み指定期間が定められ、この指定期間内に公的目的が達成されなければ指定が解除され、教育費の大幅な減額が生じる。さらに新たなカリキュラム開発や学習評価にかかわるプログラムなどが開発において連携する大学や研究機関に依存するのではなく、連携しながら学校自身が開発する自律的運営力が求められている。

## II. 韓国の世宗グローバルハイスクールの場合

2018年1月26日11時半から2時まで、世宗グローバルハイスクールを訪問した(写真1)。

世宗グローバルハイスクールは2013年3月に開校した。特殊目的学校(magnet school)に属し学区などには関係なく設置されている。特にこの高校は最初からグローバル人材育成を目的として設置されている。世宗市に設置されている事にも意図がある。グローバル人材を育成するという意図の他に、世宗市に人を集める意図が背景にある。世宗市には人があまり住まないのも魅力的な高校を作ることによって人を



写真1. 世宗グローバルハイスクール玄関を入るとコンサートなどできる階段状のオープンスペースがあり、階段の真ん中にはグランドピアノがある。

集めるという目的もその背景にあるのだ。良い学校を移転させると人が集まるということがこれまでの経験からわかっているのである。このことは韓国の人々が我が子の教育のためなら住む場所も変えるほどの教育熱心さを持つことを表している。また学校設置は町作りにつながることもわかるのである。世宗市はもともと政府機能の一部を移動することによって作られた町である。官僚や官庁に勤める人たちが集まっている。この地元から来る子供達というのはそういった人たちの子弟が多いというふうと考えられる。高校の近くには保育園、図書館、公園など環境の整った大きな団地が作られており、その名も「エリートマンション」である。

### 1. 本校が目指すグローバル人材

本校の教育レベルは非常に高く、ユネスコの「世界の優秀学校」に選定されている。その教育目標は情熱と尊厳を持ってリードできるグローバル人材を養成することである。そのモットーは「世界を抱き、夢を広げる」である。このモットーにはさらに説明があり、「世界に韓国のことを知らしめ、韓国に世界を知らしめ



写真2. 伝統楽器の演奏

る」と副題がつけられている。生徒が国際的にリードできる人材となる事の中に、世界に韓国のことを知らしめるという自国への愛国心と誇りも盛り込まれている。世界に韓国を知らしめるという意気込みは、日本のグローバル人材育成において強く表明されている内容ではない。世界に韓国を知らしめるという意図のもと、韓国文化に誇りを持ち、韓国文化を理解するべく、韓国の伝統楽器も教えられている。写真の右側は生徒たちが韓国の伝統楽器を演奏発表した際の写真である。学校を案内してくれた教師が最新のテクノロジーが整った教室で前の大型スクリーンに映し出してくれた（写真2）。

本校の紹介冊子<sup>4)</sup>によれば、教育方針は次の5項目である。

- 1 知性、人間性、創造性をもってグローバルリーダーシップを培う
- 2 幅広い知識と国際的な意識を培う
- 3 必要なコミュニケーションスキルを培いローカルにもまた国際的にも社会的課題解決に参加できるようなコミュニケーション能力を培う
- 4 韓国文化に誇りを持ち他国の価値に心を開く
- 5 地域に貢献し世界に平和をもたらす

これらの方針や目標は国家的に示されている4

つのキーワードに則っている。1つ目は自律的人間、2つ目は創造的人間、3つ目は教養人、4つ目はグローバル思考の人間である。

## 2. 教員配置の自律性

グローバル人材を養成するとあって教員には校長、副校長の他に科目担当の教員が49人、栄養士が1人、看護師が1人、そしてネイティブの教員が5人雇用されている。3人が英語、1人が中国語、1人がスペイン語である。これらの教員は非常勤である。英語教員は日本のジェットプログラムと同様のプログラムでアメリカやイギリスから来ている。イギリスから来ている教員は滞在がすでに3年経っているが、今後も継続して韓国に留まりたいと考えていた。他の2人の英語教員はアメリカから来ており1年後にはまたアメリカに帰国する予定である。

これらのネイティブの教員の配置は世宗市教育委員会によって行われている。通常の公立学校では生徒数に合わせてネイティブの教員が配置される。しかし、特に本校の場合その学校の目的に合わせて学校から教育委員会に対してネイティブの教員のリクエストをすることができ、通常の公立学校よりもネイティブの教員が多く配置されている。英語の他に中国語やスペイン語の教員も配置されていることに注目したい。日本では外国語と言うと英語になってしまっている。しかし世界では英語だけではなく多様な言語が話されているのであり、この高校はグローバル人材を育成するために英語に力を入れてはいるが他の言語も教えている。この点は、とかく英語のみになりがちな日本のグローバル人材育成に比べると、真にグローバル人材を養成するという観点からは重要ではないかと思われる。

この学校の教育方法がチャレンジングな点

は、後に詳しく述べるが、こう言ったネイティブの教員がただ語学を教えるのではなく、専門的な内容を教えるということである。たとえば、アメリカから来た教員は政治学を教えていた。はたして高校生に英語で政治学の話についていけるのだろうか。担当教員に聞くと、そう簡単ではなさそうである。

### 3. カリキュラム編成の自律性

本校においては、カリキュラムは外国語と社会科学の専門性に力が入れている。そして国語、数学は一般的な学校より授業数が少ない。カリキュラム編成についてグローバル人材を育成する目的のためにカリキュラムに自律性が与えられている。カリキュラムの編成や新たな科目を取り入れる時には、まず、教務担当者と科目代表の教員が、たたき台を作成する。この際、生徒、保護者の意見を聞く。たたき台は職員会議にかけられ、その後校長が学校運営協議会からの承認を得、教育長に報告される。

カリキュラム編成における課題は、生徒の希望に完全に応じることは難しいことである。特に、その科目を教えられる教師、教室の確保など、条件整備における制限がある。しかし、放課後や多様な講座で実現するように努めている。とは言え、カリキュラム編成は教育長の編成指針に則っており、ある程度方向性は決まっている。

### 4. 英語で何をどのように学ぶのか

#### (1) 社会問題を英語で

本校ではグローバル人材を育成するために海外体験や英語のイマージョンプログラムのようなものも組み込まれている。海外体験では、一年生から5泊6日で文化交流を目的とした外国訪問が実施される。シンガポール、マレーシア、中国、台湾、日本、オーストラリア、アメ

リカなど、既に多くの国への訪問が実施されてきた。英語イマージョンプログラムではただ単に英語を学ぶのではなく、より深く特定のテーマについて学ぶことを目指している。例えば世界の政治と問題といったテーマを扱う。この目的のために、韓国の教員とネイティブの教育との連携が図られている。深い学びのために必要ならば原書も読む。社会にある葛藤や問題を原書で学ぶというアプローチをとっている。

#### (2) ディスカッション

グローバル化に対応してディスカッションを多く取り入れているということにも本校の特徴がある。本校ではディスカッションにも大変力を入れており、女子学生が多いのだが他校との交流活動になると本校の生徒たちが最も意見を述べるとのことで、説明にあたった教員は本学の学生の討議力のレベルの高さを強調していた。

#### (3) 世界の一流の名著に触れさせる

本校は寄宿制である。夜には生徒たちは勉強から解放されて自由に過ごしていると思ってしまうがちであるが、実はこの学校では夕食後もプログラムが準備されている。

表1は生徒たちの夜の活動スケジュールである。夕食後7時10分から9時まで教室で個々の学習時間があり、その後寄宿舎へ移動する。

表1 夕食以降のスケジュール  
(グローバルハイスクール)

18:20-19:10	夕食
19:10-21:00	自律学習1時限(教室)
21:00-21:30	寄宿舎移動
21:30-23:20	自律学習2時限(寄宿舎読書室)
23:20-23:50	洗面および就寝準備
23:50-24:00	点呼および就寝
24:00-1:00	延長学習

出典：グローバルハイスクールの教員室の掲示物から抜粋。翻訳は畿央大学の石川裕之氏に依頼している。



写真3. 日本書記が並ぶ図書館の本棚



写真4. 世宗科学芸術アカデミー外観

30分の移動時間の後、夜の9時30分から11時20分まで18名から20名の生徒達が学年に関係なく、著名な本を一年かけて輪読し学ぶという。

驚いたことに図書館を見学した際に偶然、日本の『日本書記』を発見した。いったい日本人の何人がこの分厚い日本書記を手にとったことがあるだろうか。訪問時には気づかなかつたが、後にNHKの歴史ヒストリアで偶然、日本書記にはかつて日本の経済・政治の基盤づくりに渡来人の技術や社会制度に関する知識を活用したことが記載されていることがわかった。韓国の人々の歴史との接点が記載されているのだ。またアリストテレスの著書も並んでいた(写真3)。本校が国際的に有名な本を集めているということが垣間見られた図書館訪問であった。グローバル人材とはどのような教養を身に付けた人材なのか。コミュニケーション能力だけに偏らず、中身を深めることに力を入れている点が印象的である。

### Ⅲ. 韓国の世宗科学芸術アカデミーの場合

世宗国際学校のすぐ隣にあるのが、世宗科学芸術アカデミーである(写真4)。2018年1月26日2時～4時まで訪問した。本校は全寮制

の共学制学校である。こちらも全国から優秀な生徒を集めている。校長先生は元文部官僚であった。元文部官僚から校長への転身の事情は明らかではないが、政府との関係が密であることは予測できる。

校長によれば、全国に8校ある同様の英才教育を行う学校の中で、本校のアイデンティティ、つまり他校と異なる特色をどのようにつくるか苦心してきたという。そのアイデンティティ創りにおいて中心にあったのが独自のカリキュラムづくりであった。

#### 1. 世宗科学芸術アカデミーにおける教育の特徴

##### (1) 芸術と科学の融合

本校は韓国政府の認可を受けて世宗市が創設した公立のエリート校である。特徴として科学と芸術が融合した教育を行っていることである。校内には数多くの実験室があり、理科系の教育における施設設備の充実ぶりがうかがわれる。実験室の棚には英語の本が並ぶ。たとえば、有機化学で有名なクラム(Donald J. Cram)が著わしたテキストも並んでいる。クラムはノーベル賞を受賞している。本学の学生が古典的原書も読みながら実験や学習をしていること、そして高校生が利用するテキストとしてはかなりハイレベルであることがわかる。しかし、科学

だけではない。廊下や生徒がたむろできるスペースには素晴らしい芸術作品が陳列され、芸術的雰囲気も大事にされていることがわかる。雰囲気だけではなく、実際に授業を通して作成するものにも芸術と科学の融合が実現されている。芸術と科学を融合させた教育を志向していることを、本校玄関の広いスペースに展示されている生徒の作品が示している。一見、普通の制作物に見えるが、実はコンピュータを駆使し、デザイン性と技術的な卓越性の両面を備える作品である（写真5）。また、玄関には生徒の絵画の優秀作品が展示されている。日本画のような淡い色使いの絵画もある。ある教師がこれらの絵をみて、「私には絵の才能がないからこんな風にはとても描けない」、と言ったところ、絵画担当の教師が、「いやいや、彼らでも描けたのだから私が指導すればあなたにも描けるようになりますよ。」と言ったそうである。

このような世宗科学芸術アカデミーの教育内容など教育全般については、政府系シンクタンクである韓国教育開発院において事前に研究された上で、実践に移されている。理科系と文科系を融合させたコースや科目を提供するアメリカにおける高等教育の動向なども把握されていると思われる。実験室や設備、多数の有名な絵



写真5. コンピュータを駆使して作製された生徒の作品

画など、かなりの金額が投じられているのがわかる学校である。

## (2) 生徒が提案できる新たな科目の開発

本校を訪問して驚いたのは、生徒が新たな科目を提案できることである。複数の生徒が集まり、新たな科目を提案した場合、教員たちによる検討の末、採用されることがある。具体的に実現した科目も複数ある。その一つには「スポーツ統計」がある。クラブ活動などでスポーツ競技と勝利に熱が入る年齢である。学習を課外活動に直接的に生かすことができる、若者の思いが込められた科目である。ちなみに、韓国では高等教育法で学生が提案する専攻を認めることができる。本校は中等教育レベルであるが、カリキュラム開発については、高等教育に準ずる自律性が与えられているのである。

学生が提案した科目については、検討・実現・実践のプロセスで学内の教員が連携して取り組む。しかし、新たな科目を規定のカリキュラムの中に構造的に取り組み、具体的な学習内容を構成し、実際の授業における教員の分担役割などを調整するなど、簡単な作業ではない。教員側に通常の業務に加え、多大な負担が生じる。訪問の際に学校の説明にあたってくださった先生は、負担が大きいことを認めながらも、それが同時にこの学校への就職を希望した先生たちにとってはやりがいでもあることも伝えてくださった。

## 2. 突きつけられる平等性の問題

本校はエリート校で、国の威信をかけて莫大な資金がつけ込まれている。この点は、今回紹介した世宗グローバルハイスクールと世宗科学芸術アカデミーに共通している。これらの学校があることは世宗市にとって誇りに違いないが、世宗市の住民にとっては、複雑な心境もある。全国から優秀な生徒がこの学校に集まって



くる。しかし、その教育予算は基本的には世宗市の税金で賄われている。レベルが高いため、地元世宗市の子どもたちでも入学できる子どもは限られている。自分の子どもは入れない学校のために税金を支払うのかということになる。特権的学校を維持することに対する市民の疑問が投げかけられている。

## 考察

英才教育を行う2校の訪問を通して、これらの学校に共通して与えられているカリキュラム開発における自律性について報告した。世宗科学芸術アカデミーでは、カリキュラム開発に部分的に生徒も関わることができ、教師と生徒のコラボレーションが実現していることが印象的である。また、科学と芸術を融合した科目や学習内容を提供していることも、国際的な潮流の中にあるのかもしれない。しかし、両方の学校で説明にあたってくださった教員達から異口同音で伝えられたのは、カリキュラム開発は大変だということである。教員のやりがいや誇りにつながるものの、自律性は教員に高い能力と多くの時間を費やすことをいとわぬ情熱と労力を求める。両校の案内に当たってくれた教師達はいずれも志願してこれらの学校に就職しており、これらの学校の教員として採用されたことに誇りを感じている人々であった。

また、初等・中等教育段階での学問領域の融合については、議論もある。個々の学問領域を学んだ上で2つの領域の融合を図ると、最初から融合した学習内容にするのでは、どちらが深い学びにつながり、生徒の才能を開き、イノベーションを導く発見や開発につながるのか、意見が分かれる。いずれの立場も立証は容易ではない。

平等の観点からも、一定のノウハウが開発さ

れ、マニュアル化されれば、通常予算で運営されている全国の学校に普及できるものなのかが問われるだろう。少々の失敗にも対応していける能力レベルの高い生徒と教員から構成され、多額の公的資金が投下されるエリート校においてのみ可能なことであれば、その有用性が説明されなければなるまい。

もし、特権的な学校においてのみ可能なことであるとすれば、そして多額の公的資金が投下され続けるとすれば、社会的な疑問が投げかけられても不思議はない。グローバル人材の育成は現在の国際的流れの中では不可避の事柄である。教育における卓越性の達成は、公的資金の集中はやむをえないのかもしれない。しかし、公的資金がいかに平等に分配されるか、いかに多くの国民のメリットとなるように還元されるかも重要課題である。一部のエリートに多額の公的資金が特権的に配分されたとしても、それが国民の利益はもちろん、世宗市の市民の利益にもつながるということをどのように世宗市の市民、そしてより広く国民に説明でき、納得してもらえるかが課題である。

最後に韓国の事例から日本への示唆について考える。今回の韓国の事例は、一定の自律性が付与される状況下で、本論の最初に示したスーパーグローバルハイスクールの3つの課題（学力、発言する力、英語偏重）を克服できることを示唆している。カリキュラム開発のために学校に与えられた自律性を活かして、生徒の意見を反映して複数の学問領域が融合した新たな科目を設置するなど、生徒の主体性や創造性を刺激する取り組みは興味深い。有名な原書に触れ、グローバルに通用する教養を培おうとしている点は原書はおろか、本を読まなくなった大学生が増えつつあるのではないかと思われる日本において、再度、認識すべき教育の在り方ではないだろうか。学校にグローバル人材育成にふさ

わしい環境を創ろうとすると教員人事に関する自律性が必要になる。様々な教育問題に対処するためにも、教員定数を増やす必要がある日本の学校現場の現状を思えば、グローバル人材育成のためだけでなく、予算、人事、カリキュラムにおける自律性の幅を拡大することが解決につながる可能性はある。

ただ、問題は教師の労力と費用である。日本では今、働き方改革が議論されている。自律性によって与えられる自由の代償として受け入れなければならない負担をどのように軽減できるかも検討する必要がある。また、費用については、社会からの不平等感が高まらないような配慮が必要である。

謝辞：調査訪問を快く引き受けてくださった世宗グローバルハイスクール、世宗科学芸術アカデミーの校長先生、教員の皆さま、そして今回の訪問と通訳で尽力してくださった畿央大学の石川裕之先生に心からお礼申し上げます。

なお、本研究は科研 JSPS の補助金で実施した（課題番号 15H05201：研究代表者中島千恵）。

## 注

- 1) 「平成 28 年度スーパーグローバルハイスクールの指  
定について（平成 28 年 3 月 31 日）」（文科省のウェブ  
サイトより：[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/  
kokusai/sgh/](http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/sgh/)）
- 2) 第 1 回スーパーグローバルハイスクール（SGH）事  
業の検証に関する有識者会議議事要旨より：[www.  
mext.go.jp/a\\_menu/kokusai/sgh/1402893.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/sgh/1402893.htm)
- 3) 中間評価については、文部科学省のサイトから閲覧  
可能：[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/kokusai/sgh/](http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/sgh/)
- 4) 世宗グローバルハイスクールの教育方針について  
は、本校の次のウェブサイトからも閲覧できる：  
[http://eng.sjgl.hs.kr/msi/cntntsService.  
do?menuId=MNU\\_0000000000002482](http://eng.sjgl.hs.kr/msi/cntntsService.do?menuId=MNU_0000000000002482)